

小学校・中学校における学習者の英語有用感の変化
— 「小学校英語学習は役立っている」の調査—

今西 竜也

The Transition of Usefulness of English Learning
— The Investigation into Usefulness of English Learning at Elementary Schools —

Tatsuya IMANISHI

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要

第2号 (2020年3月)

Journal of Educational Research
Center for Educational Career Enhancement

No.2 (March 2020)

小学校・中学校における学習者の英語有用感の変化

—「小学校英語学習は役立っている」の調査—

今西 竜也

京都教育大学附属京都小中学校

The Transition of Usefulness of English Learning

—The Investigation into Usefulness of English Learning at Elementary Schools—

Imanishi, Tatsuya

2019年11月29日受理

抄録：2020年の小学校英語教科化を控えた今、学校現場では新しい学習の始まりに期待で胸を膨らませている子ども、保護者、指導者が多いことだろう。しかしながら少なからず、新しい学習の始まりに当たって、心配や不安を持つ人々もその中にいるようである。元来学校とは楽しい空間であるので、心配や不安があるというならば、少しでもそれらを減らしたいと考える。本稿では小学校・中学校における学習者の英語有用感について、小学校での英語学習に焦点を当てて記す。

キーワード：小学校英語・有用感・英語教育

I. はじめに

2020年実施の指導要領改訂により、小学校5年と6年での英語学習が教科となる。また、今まで5年と6年で行っていた英語活動が3年生・4年生で行われることとなる。前回の指導要領の改訂から、小学校5年と6年で行われてきた英語の学習は一定の効果を得ているとは感じられるものの、具体的にはいったいどれほどの効果を得ているのか。筆者が目にする小学校英語の授業や指導者はほとんどが非常に熱心に取り組みされており、生き生きとした子どもの姿を見て感心するのではある。

しかし水を差すように発表された調査に愕然とした人々も多いのではないだろうか。2017年にベネッセ教育総合研究所が発表した「中1生の英語学習に関する調査」においては、「小学校での英語の勉強は中学校で役に立つ」という問いに対し、小学6年では82.6%の学習者が肯定的に捉えているのに対し、中学1年では53.9%となっている。つまり、小学校では英語の学習に期待を膨らましていたが、中学生になって中学校の英語の学習を始めると、多くの学習者が小学校の英語の勉強は役に立たなかったと感じているのである。英語の学習自体に対する否定的な見方は昔からあった。例えば直山(2007)によると、「英語の好き嫌い」「苦労があった・なかった」で分類した保護者の意識調査において、英語が好きな保護者の7割近く、また英語が好きでない保護者の9割以上が、学校の英語教育は役に立たなかったと答えている。また、師子鹿(2012)では、中学入学後1年経過した学習者の意識調査をし、「小学校での英語活動は楽しかったけど、中学での英語の勉強には役立たない」など、小学校の英語の学習が中学の英語の勉強には役立ったと肯定的に捉えていない傾向を示している。

疑問が残るのは、保護者の意識に関していえば、保護者が英語教育を受けたのは少なくとも20年は前であり、この間に指導要領の改訂や、よりよい指導の研究が多くなされてきていることを考えれば、十分に現状において変化していると思われる。また、小学校での英語学習が役に立ったかどうかを中学1年の学習者に問うことは、小中接続時の学習者の意識の変化をみることはできても、小学校英語学習が学習者の将来においてすべて否定されるものではないのである。Ollerら(1974)は、早期英語教育の学習効果に関して総合的な英語力を測定し、英語の熟達度が、中学校1年生では早期英語学習者の方がすぐれているものの、学習が進むに伴ってその差が小さくなり、高校2年では有意差がないと示している。また、樋口ら(1986, 1987, 1988, 1989)では、早期英語学習者に対する、高校2年生での調査が行われており、4技能においては、早期英語学習未経験者と比較してすべて高

い熟達度を示したことが見て取れる。さらに松川(1997)では、小学校時代の英語学習経験の有無で意識調査と技能テストを実施したところ、反応の速さや内容の適切さにより、経験者の方がすぐれており、英語力やコミュニケーションに対する積極的な態度が育っていることを明らかにしている。確かに、早期英語教育は学習者の英語能力に肯定的な影響を与えており、また、態度面でも意欲的な意識を期待できるようである。過去の研究では、松宮(2009)において、早期英語教育から、コミュニケーション活動に対するより積極的・好意的な態度や英語に対するより好感的・肯定的な態度が期待されると述べているほか、池中(2008)では、中学校以前に英語を学習したことが役に立っていると肯定的に捉えている学習者は7割を超えていることを示している。また、岡崎ら(2013)では、中学1年の学習者に、今まで体験した外国語活動が役に立っているかを尋ねた結果、「よくある」「かなりある」「時々ある」を合わせると72%となった。

では、先述の英語教育は役に立たないという立場との相違はどのように解釈すればいいのだろうか。一つの仮説は調査を実施する学年によって変化する可能性である。山田(2012)では、中学校3年間の「小学校英語活動が役に立っている」と感じる割合を調査しており、中学1年から68%、57%、47%と年を経るにつれて減少していることを示している。また、もう一つの仮説は、何をもち「役に立つ」と捉えるのかである。金(2013)によると、小学校卒業者の英語学習に与えた影響の調査において、「英語に親しんだ」「外国人に会っても物怖じしなくなった」「英語を聞く力が身についた」「英語の基礎が見についた」に対して、順に83.3%、68.9%、64.4%、45.6%と、情意的な部分への有用感が高い傾向を示している。しかしながら、上記の2つの研究においては、英語に慣れ親しむことを目的とした英語活動の延長線上にある調査であり、小学校、中学校の接続や一貫したカリキュラムに足を置いた研究ではないことが指摘できる。2020年の小学校指導要領の改訂および2021年の中学校の指導要領の改訂により、小学校と中学校の接続がさらに強固なものとなり、より一貫的で一体的な英語の学習が進められていく。この時、小学校での英語学習は本当に役立たないのであるか。

京都教育大学附属京都小中学校では、1999年より小学校英語の研究を進めており、小中一貫校として現在では1年(小学校1年)から9年(中学校3年)まで必修教科の英語の学習を実施している。特に必修教科英語と英語活動と一線を画すのは、慣れ親しむことだけではなく、実際に使える英語として、9年間のカリキュラムを設定し、発達と学習の段階に合わせてスパイラルに学習するということである。必修の英語学習を小学校時に経験した学習者に対して、英語が役に立っているか否かを調査し、ここに報告する。

II. 研究方法

2017年に、5年から9年(中学3年)において、英語学習に関する調査を行った。また2019年に、9年(中学3年)において同じ調査を行い、2017年時に7年であった学習者の追跡調査となるべく回答を分析した。調査の項目は表1のとおりベネッセ教育総合研究所と同じとした。また、どのような時に役に立つのかを明らかにするため4技能5領域についてそれぞれ調査した。回答は「あてはまる」「どちらかと言えば当てはまる」「どちらかと言えば当てはまらない」「当てはまらない」の4カテゴリーとしている。調査対象は各学年32人学級の3学級を基本としている。さらに、学習者間において、経年による意識変化を調べるため、TOEFL Primary Step2のスコアから得られたCEFRの分類によってそれぞれの違いを調査した。

表1 英語学習に関する調査項目①

1	英語が分かったり通じたりわかったりするとうれしい
2	英語の授業に一生懸命取り組んでいる
3	他の教科と比べて英語は面白い
4	教室の外で英語を使ってみたい
5	小学校での英語の勉強は中学校で役に立っている

III. 結果

調査の結果を表2に示した。一つ目の項目である「英語が通じたりわかったりするとうれしい」に関しては、6年から7年(中学1年)で少し減少している。これは全国的な調査の結果とも一致しているが、8年(中学

2年)、9年(中学3年)と進むにつれ、肯定的な回答の比率は上昇し、9年(中学3年)生においては、ほぼすべての学習者が、「英語がわかったり通じたりするとうれしい」と回答している。

一生懸命に取り組むのは学習者の本分でもあるが、「英語の授業に一生懸命取り組んでいる」と答えた比率は、全国でも本校の調査でも変わりなく回答を得ている。ただし5年から9年(中学3年)までで回答の割合がまちまちであり、一貫した傾向はみられないようである。

「他の教科と比べて英語はおもしろい」と肯定的に回答した学習者は、全国の調査では下降しているものの、本校の調査での回答では増加しており、その増加はさらに9年(中学3年)まで増加している。特に7年(中学1年)から8年(中学2年)への差が大きく、おおよそ8割を示しているのがわかる。5年から比べれば、2割も上昇して中学校での学習を終えているのがわかる。

「教室の外で英語を使ってみたい」と答えた学習者の割合は、全国の調査と同様に小学校から中学校に上がるタイミングで下がっている。しかしながら、8年で上昇し、9年まで上昇を続けている。しかも9年(中学3年)時においては、8割を超える学習者が、教室の外で英語を使ってみたいという意識を持っている。

今回の調査で注目すべき「小学校での英語の勉強は中学校で役に立っている」に関してしてみると、今回の調査でも全国での調査と同様、6年から7年(中学1年)の間で一定の下降が見られる。やはり中学校での学習を始めるにあたり、小学校での英語の勉強の有用性について疑問を持つ学習者が少なからずいるようである。しかし注視すべきはその後の変化であり、8年(中学2年)、9年(中学3年)となるにつれ、小学校での英語の学習の有用感は一貫して上昇し、最終的には9割以上の学習者が、小学校での英語の勉強が役に立っていると感じている。さらにその後の調査では、7年(中学1年)の学習者の2年後、9年(中学3年)生になって時点では、やはり小学校の英語学習に対する有用感は一貫して上昇している。また、TOEFL Primary Step 2で試験した学習者の英語の能力をCEFR A1以下とCEFR A2以上に分けてノンパラメトリック検定を行った結果、両群に有意な差はなかった。

2019年の9年(中学3年)に対して、小学校の英語の学習は、どのような場合に役に立つのかを、新指導要領の示す4技能5領域に分けて聞いたところ、聞くことや話すこと[やりとり]において、特に役に立つと感じていると回答を得た。

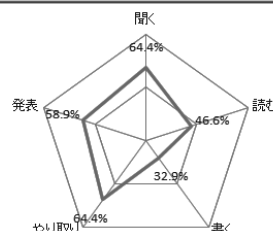
IV. 考察

6年から7年(中学1年)で、「英語がわかったり通じたりするとうれしい」と答えた割合が下がっているにもかかわらず、その後上昇している。中学1年では、教科書を見る限り単純な対話が多く、その後英語の表現や語彙が増えるにつれ、より複雑な対話や自分のことや考えを述べる学習が増えていることから、英語での理解や

表2 調査の結果

1. 英語がわかったり通じたりするとうれしい			
京都市小5年	70.2	22.3	92.6
京都市小6年	56.8	31.8	88.6
全国小学6年	53.4	30.9	84.3
京都市小7年	41.0	43.4	84.3
全国中学1年	46.5	36.4	82.9
京都市小8年	70.2	23.8	94.0
京都市小9年	39.0	57.3	96.3
2. 英語の授業に一生懸命取り組んでいる			
京都市小5年	40.4	39.4	79.8
京都市小6年	52.3	37.5	89.8
全国小学6年	36.1	39.4	80.3
京都市小7年	36.1	54.2	90.4
全国中学1年	39.6	40.7	79.3
京都市小8年	50.0	45.2	95.2
京都市小9年	25.6	61.0	86.6
3. 他の教科と比べて英語はおもしろい			
京都市小5年	22.3	38.3	60.6
京都市小6年	14.8	46.6	61.4
全国小学6年	23.3	43.4	66.7
京都市小7年	26.5	42.2	68.7
全国中学1年	22.5	35.8	58.3
京都市小8年	20.2	58.3	78.6
京都市小9年	20.7	58.5	79.3
4. 教室の外で英語を使ってみたい			
京都市小5年	42.6	22.3	64.9
京都市小6年	38.6	33.0	71.6
全国小学6年	30.4	30.1	60.5
京都市小7年	19.3	38.6	57.8
全国中学1年	23.3	32.9	56.2
京都市小8年	48.8	31.0	79.8
京都市小9年	26.8	59.8	86.6
5. 小学校での英語の勉強は中学校で役に立っている			
京都市小5年	66.0	25.5	91.5
京都市小6年	67.0	21.6	88.6
全国小学6年	50.8	31.8	82.6
京都市小7年	22.9	56.6	79.5
全国中学1年	19.6	34.3	53.9
京都市小8年	40.5	40.5	81.0
京都市小9年	46.3	45.1	91.5

2019年9年生	40.2%	47.6%	87.8%
CEFR A2	47.7%	42.1%	89.5%
CEFR A1	24.0%	64.0%	88.0%



通じる喜びは、学習が進むにつれて増加するのであると考える。「他の教科と比べて英語はおもしろい」と感じるには、やはり教科書の内容であると考えられる。先述のように、中学1年の教科書は工夫を凝らしてあるとはいえ場面が自分の身近なことや学校のことに限られている傾向がある。しかし中学2年、3年になると、環境問題や異文化の風習、歴史の問題など、多岐にわたる題材の元、おもしろさを感じる機会となっているのではないか。中学校1年の教科書から3年の教科書に向けてどのような変化が見られるのかは今後の研究の対象となるだろう。「教室の外で英語を使ってみよう」という意識は、学年が上がるにつれ上昇する傾向にある。やはり授業での学習や教科書で提供される場面がより実生活に近づくことが要因であるだろう。

小学校の英語の学習が中学校で役に立っているのかという点に関しては、中学校での学習を開始するにあたり、下降するのは全国での調査でも今回の調査でも同じ結果を得ていることから、確かであると考えられる。指導者、学習のスタイル、評価、題材等、小学校と中学校のギャップは多岐にわたるものであり、学習者の戸惑いもあると思われる。しかし特記すべきは、学習者の学年が上がるにつれ、小学校での英語の学習の意義を認める傾向にあることである。今回の調査では、小学校英語活動ではなく、必修教科英語として小学校での英語の学習を経験した学習者である。英語活動では、主に英語に慣れ親しむことが大きな役割を占めていたが、必修教科としての英語は、中学との接続に留意しながら、中学校修了段階までを包括し、発達と学習の段階を考慮したカリキュラムとしている。ともすれば、小学校、中学校それぞれでの英語の学習がいかに接続されるのかという点が、小学校での英語学習を意義あるものにするために重要であることは疑いない。指導者や学習のスタイル等の差異は小学校と中学校の教員が手を取れば埋めていけるのではないかと考える。

さらに、小学校での英語の学習が役に立つと感じる場面においては、音声面でのコミュニケーションについて肯定的な結果が出たが、読むこと、書くことでは他と比べると低い割合となっている。発達の段階も十分に考えられるべきではあるが、四技能の統合を見るのであれば、小学校段階での英語の学習において、読むこと、書くことにおいて、どのような指導が効果を生むのかということは、今後の研究を待ちたい。

V. 参考文献

- Oller, J. W., & Nagato, N. (1974). The long-term effect of FLES: An experiment. *The Modern Language Journal*, 58(1/2), 15-19.
- 池中雅美. (2008). 早期英語学習経験と英語力および学習態度に関する研究. 北陸学院短期大学紀要, 40, 85-94.
- 岡崎浩幸, & 西田幸江. (2013). 中学1年生から見た小学校外国語活動. 教育実践研究: 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, (7), 47-55.
- 金瑠淑. (2013). 小学校英語カリキュラムの効果に関する研究: A 小学校の卒業生への第2次追跡調査の結果をもとに. 研究紀要, 24, 99-106.
- 師子鹿元美. (2012). 小学6年生と中学1年生の英語学習に対する意識についての調査研究. 別府大学短期大学部紀要, (31), 93-101.
- 直山木綿子. (2007). 保護者の期待と小学校英語が求めるもの. 研究所報, 42, 27-32.
- 樋口忠彦他(1986、1987、1988、1989)「早期英語学習経験者の追跡調査一第1報～第IV報」『日本児童英語教育学会研究紀要』第5号～第8号.
- ベネッセ教育総合研究所. (2017). 中1生の英語学習に関する調査. ベネッセ教育総合研究所.
- 松川禮子. (1997). 小学校に英語がやってきた!, アプリコット.
- 松宮新吾. (2009). 早期英語教育が中等学校英語教育に及ぼす影響についての調査研究 (第一次調査). 研究論集, 90, 139-158.
- 山田王代. (2012). 小学校英語活動と中学校英語教育の連携: 3年間の調査・研究の結果から. 鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要, 2, 39-48.